



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

考えてみれば、いろいろな師にお世話になった。臨床や手術については先輩諸氏や他学の先生から教えていただいたことは言うまでもないが、母校の生化学の教授にはひとかたならぬお世話になった。

先生は父と旧制和歌山中学の同窓で、私が医学部3年のとき、授業で先生から「君が川嶋君の息子さんか」と声を掛けていただいたのが出会いである。その後、泌尿器科学教室に入局した私の学位の研究で指導いただいたのが、長い薫陶の始まりである。先生は優しくだったが研究

には厳しく、実験結果が出ると「それは本当か」とよく聞かれた。あるとき、実験の合間に「生化学とは何ぞや」と問い掛けられた。

〈11〉 恩 師

答えられるはずがない。先生は「生化学とは生命現象を化学で理解することだ。狭義の化学は分析と合成である。例えるなら自動車をばらばらに分解して、また組み立ててちゃんと走るかどうか調べるようなことだ」と言われたのを記憶している。大学院修了後も、

留学の際に書いていただいた推薦状のおかげでアメリカの師に出会うことができた。

帰国後、私は長らく泌尿器科学教室の教員として過ごしたが、作成した論文を見させていただいたり現況の報告をしたりするために、しばしば先生のお宅に伺ったものである。

定年後の悠々自適の生活を送っておられた先生に、あるとき腎臓がんが見つかった。先生は「研究でウサギの腎臓をたくさん使ったので、責任者である私がそのあたりを受けている」と冗談を言われていたが、ご指名で私が腎臓がん摘出の腹腔(ふくくう)鏡手術をするようになった。先生の

心臓の血管にはステントが5本入っており、先生は血液を凝固しにくくするお薬を飲まれていた。早めに入院していただき、一時的にその薬の作用を止めるようにして手術に臨んだ。

その手術はプレッシャーであるとともに難しかった。腫瘍が比較的大きく、静脈の走行が複雑で、しかもちよつとした出血もさらさらとして止まりにくかったのだ。手術は無事終了したが、2年後に肺に転移が見つかった。転移巣の進行は遅く、いろいろな治療を行ったもののそれをくいとめることはできなかった。今、先生は高野山に眠っておられる。最近、私は大学在籍中の最後の研究をまとめて論文にし、それらを先生の奥さまにお渡しした。論文はお仏壇の先生の前にお供えされている。